

人くさい！人くさい！」

●と、赤鬼、青鬼のいる鬼ヶ島は大騒ぎになってしまったげな。しかし、

すねこ太郎がちょうど鬼のサシハマの下に隠れちよるので、鬼たちにはわからなかったげな。

○「おい、鬼たち！ 私はへすねこ太郎と云う者だ！」

私はお前の高下駄の下におる！ よく探してくれ！」

私はお前たちに会いに来た！」

どうか、お前たちの弟子にしてくれ？」

●色々あったが、鬼たちと話はうまくまとまって、

ついに、太郎は鬼たちの弟子入りをすることになったげな。

もちろん、太郎は一生懸命働いて、

鬼たちの気に入られるように頑張った。

しばらく経ったある日、

太郎は鬼たちに頼み事をした。

○「鬼ヶ島にはへ打ち出ん小槌Vちゅうのがあるじゃろ？」

それ使こうて、私をだ、

一人前に五尺余りの人間にしてくれんか？」

●「何か、そんなこつか！ 心やしいが！」

なして早う言わんかったつかよ？」

どれどれ、じつとしちよけよ！」

ん、大きくなれ！大きくなれ！ うんと大きくなれ！」

○「おい鬼！ 五尺でいいぞ！もいきすぎんようにな！」

おい、伸びてる、伸びてる！」

おい、もういい！ そこでよし！ もういいって！」

●そういったことで、

すねこ太郎はきれいな男前の五尺の男にでもらたげな。

お返しに、太郎は知恵があったかい、鬼たちにいろいろ仕事をおそえてやった。

(ポーズ) (MUSIC 3)

鬼たちに喜ばれ、鬼ヶ島の暮らしも三年がたった。

そろそろ、爺さんと婆さんのところへ帰らなければならぬ。

○「おい、鬼よ！」

私は婆さんのへすねこVから生まれた小んめえ子じゃったが、

こういう風にお前たちに大きくしてもらた！」

これから里に帰って、爺さん婆さんを喜ばせようと思う！」

ついでに、舟を用立ててくれんか？」

●「そうか、帰るか！」

いつかはこういう日が来るとは思ったが・・・そうか・・・

よし、この舟を使え！」

そしてこの打ち出ん小槌も持っていけ！ お前にくれるわい！」

○「有り難う！ 赤鬼、青鬼！ ほんとに有り難う！」

この恩は一生忘れない！ さようなら！ みんな元気で！」

●今度は、大きな船に乗って、観音様のお札は手に持って、

すねこ太郎は爺さん婆さんところさね帰って行った。

(ポーズ)

太郎が無事家に戻ると、爺さん婆さんはビックリ、喜んで、

○「おい！ 大きくなったわい！」

やっばり、観音様のさずかり子は大きくなったわい！」

いかった、いかった！ これで思い残すことは何も無え！」

●と、いった訳で、

太郎と爺さん婆さんはへ打ち出ん小槌Vでいい物を出して、

分限者どんになつたつと。

〔平成十二年十一月三十日 受理〕

## 9 放送用台本「すねこ太郎」

原話語り手・西原 ハツ さん  
平成11年5月28日放送分

(●) 男性アナウンサー ○ 女性アナウンサー

(MUSIC 1)

● 昔、仲のいい爺さんと婆さんがおったが、二人には子がおらんかった。

爺さん婆さんはどうしても子が欲しかったので、

いつも「観音菩薩」を信仰して願をかけていたげな。

観音さんの石段は、八百段上がって百段おりて、

年寄りには、へてげな、きつかったが、

それでん、毎日参つちよったげな。

それでん、子はなかなかできんかった。

ある日の事、

二人が八百段上がって、百段降りる途中、

婆さんが転げて、すねを打ってしまった。

○ 「あ痛、た、た！ 爺さん、すねこを怪我したがよ！ 痛えー！」

(ポーズ)

● 家に戻ると、

打ったへすねこは、だんだんふくれてきたげな。

どうやら十月(とつき)の神が受け取ったのか？

何と、おすねこから、可愛い子が生まれてきたげな。

皮をひらいて子の頭が出てくると、

婆さんはまたまた、

○ 「あ痛、た、た！ 爺さん、すねこから子が出てきたがよ！ 痛えー！」

● 右のすねこから、こんまい人形さんのような子が出てきたと。

○ 「こりゃ、観音さんのさずかり子じゃぞ！」

「良かった、良かった！」

● 爺さん婆さんは喜んで、

早速、その男の子に産湯をつかわせて、

半紙の上で拭いて、とりあげたげな。

眉は絵に描いたごつ、まこち美しい顔立ちの子じゃった。

婆さんはそれから、重湯をつくり、

むしった鳥の羽でそれを吞ませたげな。

(ポーズ)

三月四月(みつきよつき)たつて、

へすねこは大きくならんかった。

二年三年たつと、

言葉は十五六くらいの大きな子の使うごつなって、

体も、

一寸ほどのハタカシロビキぐらいにはなちよったげな。

ある時へすねこは爺さんにこう言った。

○ 「爺さん！ 私はおわんの舟に乗って、お箸のカイで鬼ヶ島に行きます！ どうか舟をつくって下さい！」

と、

(ポーズ)

そしてへすねこは

観音様のお守り札を帆にしたてたへおわんの舟で、

ある日、風にふかれて川を下っていったげな。

(ポーズ) (MUSIC 2)

すねこ太郎は、ずっと行きたかった鬼ヶ島にとうとう着いた。

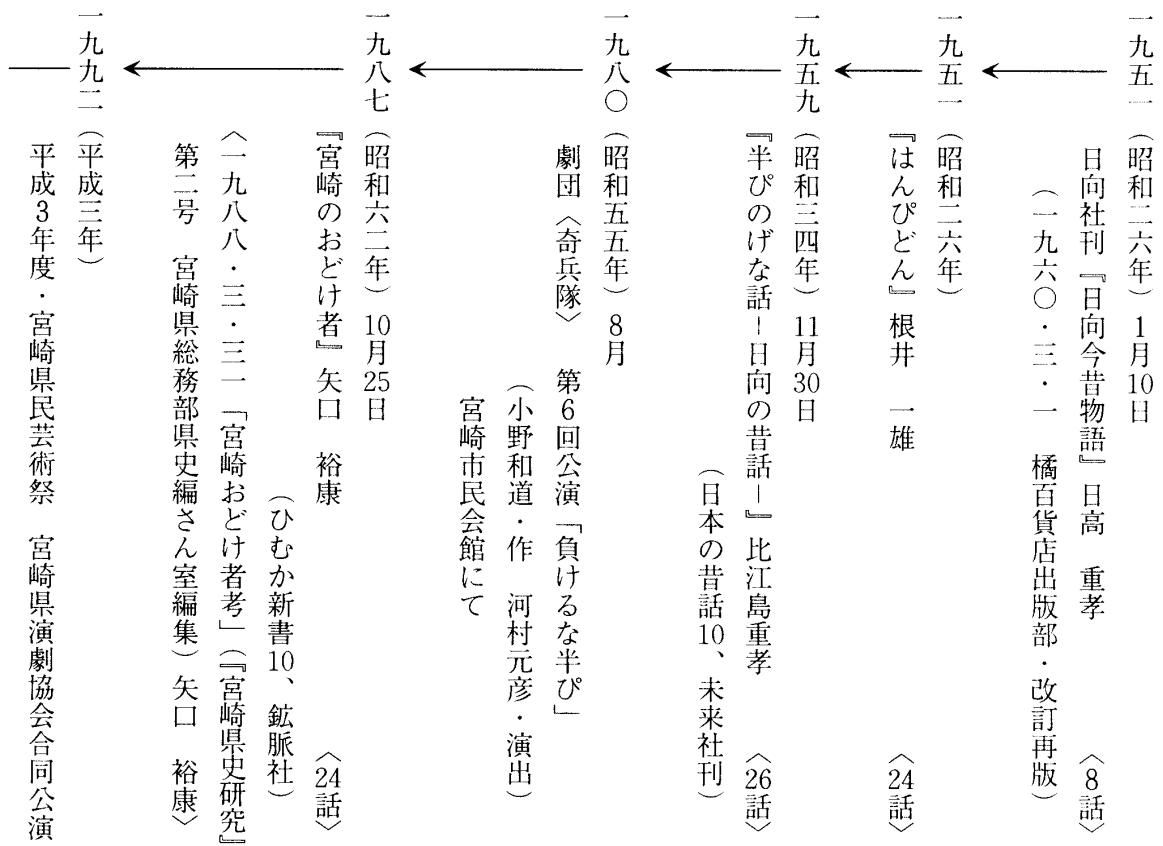
ところがである、

● 「あ、何か人間の臭いがするぞ！」

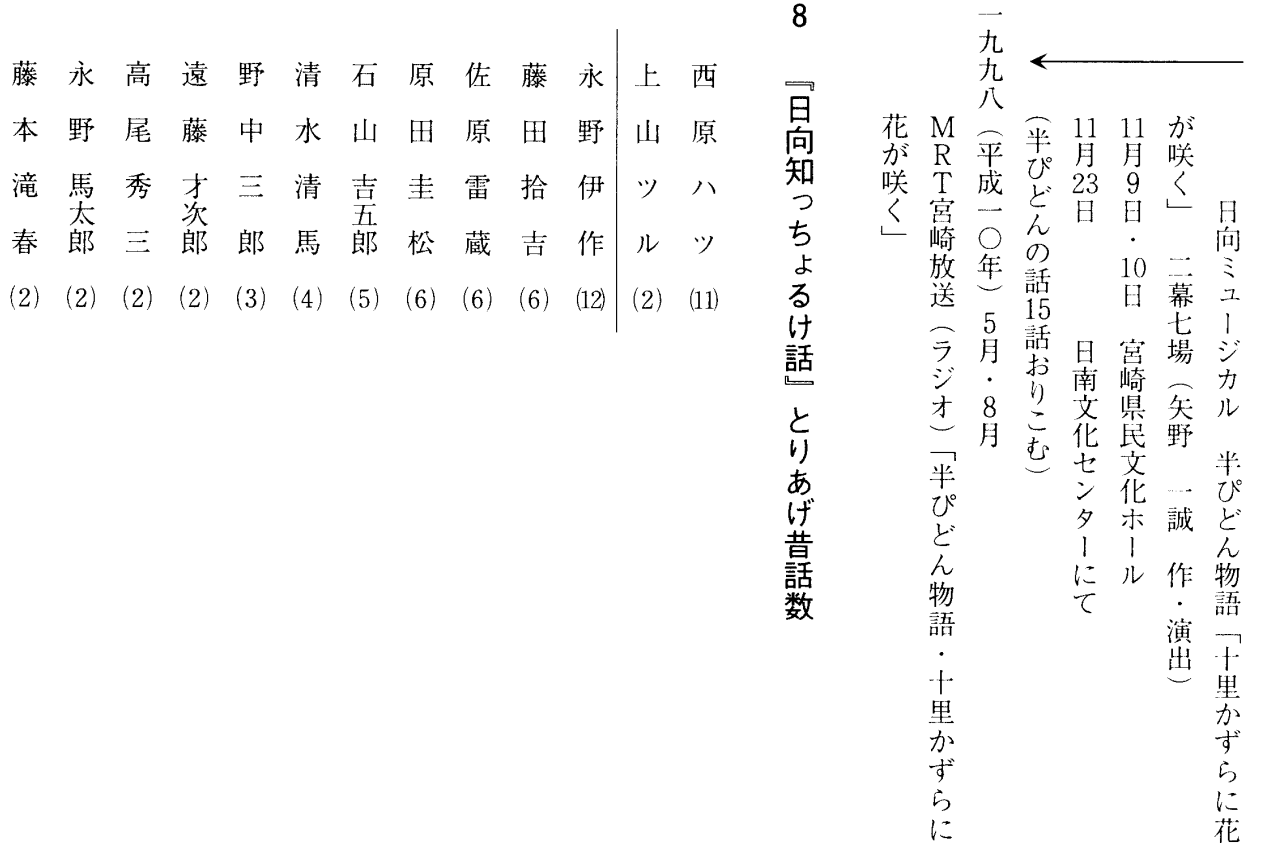
どこか人間がいるな？ 探せ！ 探せ！ あゝ、変な臭いがする！

7 半ぴのげな話と宮崎県

掲載話数



8 『日向知つちよるけ話』とりあげ昔話数



5 『日向知っちよるけ話』と地名

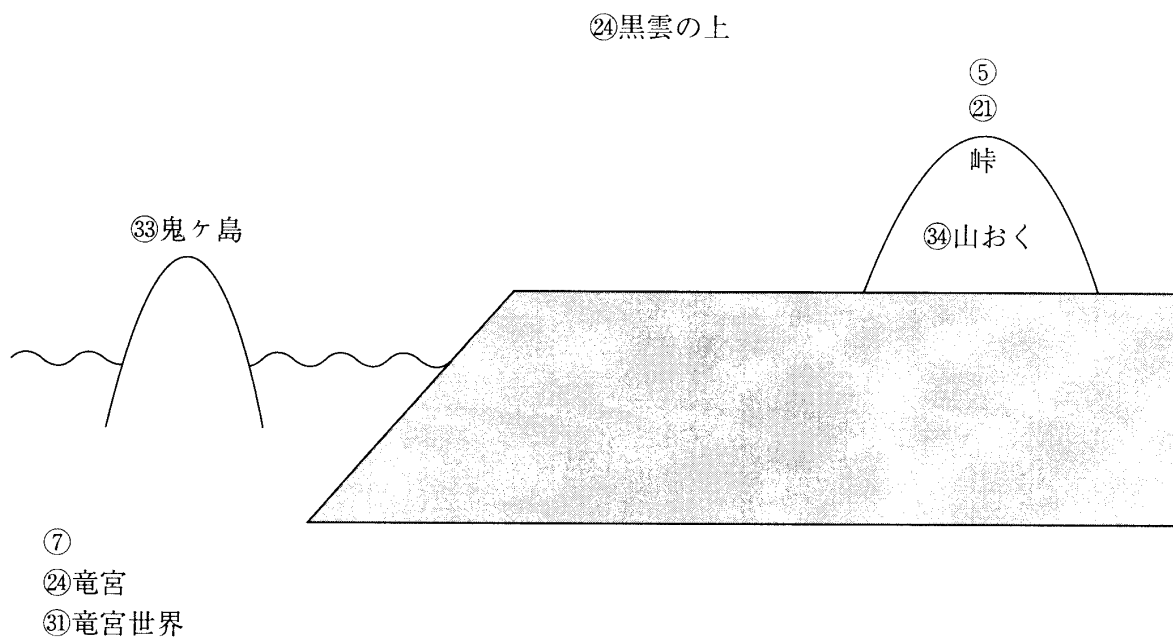
宮崎県外	⑤京都、大阪 ⑱⑳大阪 ⑤④四国、西国 ⑥⑤大阪、熊本、球磨川 ⑥⑧朝鮮 ⑥⑨霧島、大阪、薩摩、瀬田
宮崎県内	③②⑤⑥⑦跡江 ③②生目 ⑥②生目村 ①①下北、米良の小豆坂 ②①下那珂(の山) ②⑨下北、柏田、瓜生野、花ヶ島、池内、住吉、村角、大島、 赤江、曾山寺、青島、横町、加納、船引、本庄 ②⑧田野のテンケン坂 ⑥③清武川 ⑦⑥上中野、下中野 ④⑨竹の原 ⑤②佐土原、広原 <sup>わら</sup> ⑤⑤辻(高岡町) ⑤⑨高岡の町 ⑦③穆佐 ②②日向 ⑦①本庄の森永

6 『日向知っちよるけ話』と登場人物

半びどん	①① ⑬⑬ ⑱⑱知恵者 ②②日向の半びどん ②⑧ ③②貧乏な男・子供が五人も六人もおって・日稼をしてまかのうていた ③⑥ ④①知恵者 ④⑥ ⑤⑩貧しい家・子供が五人・屋敷が三反ばかり・三反の畑に嫁じよがカライモを作っていた 分限者家に毎日日稼	ばあさん じいさん	以下「」は類話 ④「笠地藏」 ⑨「三年寝太郎」(石山吉五郎) ②①「二寸法師」 ③③ ③⑧
⑦③ ⑦⑦酒好き ⑥⑦半蔵夫婦の子・小作 ⑥② ⑤⑨ゲキどん ⑤⑤外記どん ⑦⑥	ばあさん	じいさん	⑦⑥ ②⑨ ⑧ ⑦ ⑥(「たご作のゆめ」) 類話

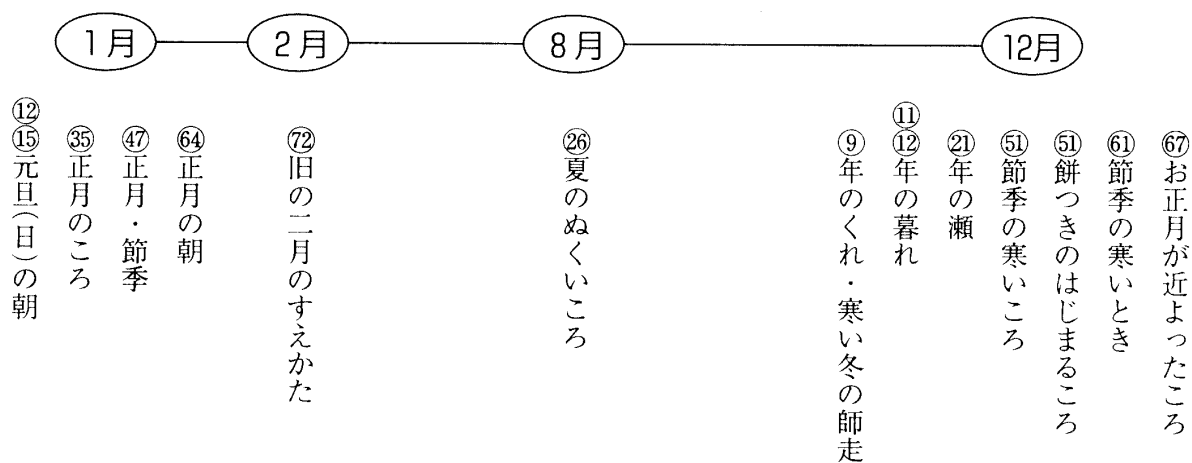
3

『日向知つちよるけ話』と空間



4

『日向知つちよるけ話』と時間



## 2 『日向知っちょるけ話』と環境

**昆虫** 百足<sup>14</sup><sup>60</sup> カマキリ・コウロギ・カブト虫<sup>14</sup> みみず<sup>17</sup> 熊蜂<sup>32</sup><sup>71</sup>

### 動物

狸<sup>4</sup><sup>40</sup> 鼠<sup>6</sup><sup>12</sup><sup>17</sup><sup>40</sup>  
 猫<sup>12</sup><sup>17</sup><sup>49</sup> 牛<sup>12</sup><sup>17</sup>  
 狐<sup>16</sup><sup>42</sup><sup>47</sup><sup>48</sup><sup>61</sup><sup>71</sup>  
 馬<sup>17</sup><sup>37</sup><sup>40</sup><sup>43</sup><sup>44</sup><sup>58</sup><sup>67</sup>  
 うさぎ<sup>17</sup><sup>19</sup><sup>23</sup> むじな<sup>23</sup>  
 鹿(の角)<sup>44</sup> サル<sup>56</sup><sup>57</sup>  
 猪の子<sup>71</sup> もぐら<sup>76</sup>

### 魚他

ウナギ<sup>7</sup> ごろり(ハゼの子)<sup>36</sup> カニ<sup>56</sup><sup>57</sup><sup>58</sup> 小鮒<sup>61</sup>  
 鯉・ハゼクロ・なまず・鯛<sup>63</sup>

### 鳥

借金とり<sup>1</sup> 孔雀・ふくろどん・みそちゅう<sup>18</sup>  
 浜鴨<sup>19</sup> カラス<sup>31</sup><sup>53</sup> 鷹<sup>40</sup><sup>53</sup> 鴨<sup>46</sup> 山鳥<sup>47</sup>  
 ニワトリ<sup>53</sup> つばめ・雀<sup>68</sup> めんどり・白ニワトリ<sup>71</sup>

よだきごろ<sup>2</sup>

### 人間

#### 庄屋他

庄屋<sup>10</sup><sup>32</sup><sup>46</sup><sup>48</sup><sup>67</sup>  
 代官<sup>11</sup> 長者<sup>15</sup><sup>51</sup><sup>60</sup>  
 殿様<sup>20</sup><sup>31</sup><sup>54</sup>  
 お大尽様<sup>25</sup>  
 分限者<sup>33</sup><sup>50</sup><sup>54</sup> 侍<sup>36</sup>  
 金持ち<sup>40</sup> 大名<sup>51</sup>

#### 宗教者

和尚<sup>3</sup><sup>34</sup><sup>35</sup><sup>42</sup>  
 法者<sup>31</sup><sup>75</sup>  
 小僧どん<sup>34</sup><sup>35</sup><sup>42</sup>  
 西行<sup>51</sup> 坊さん<sup>64</sup>  
 琵琶ひき<sup>69</sup>  
 山伏<sup>72</sup><sup>76</sup> 六部<sup>74</sup>  
 易者・行者<sup>76</sup>

#### 夫婦<sup>25</sup><sup>26</sup><sup>27</sup><sup>29</sup><sup>32</sup><sup>47</sup>

<sup>52</sup><sup>60</sup><sup>64</sup><sup>67</sup><sup>74</sup>

#### 親子<sup>25</sup><sup>66</sup><sup>76</sup>

#### 職業

石屋<sup>3</sup> 傘屋<sup>24</sup>  
 漁師<sup>24</sup><sup>31</sup> 馬喰<sup>25</sup><sup>37</sup><sup>40</sup>  
 籠をかついで行商しちよ  
 る人・イリコにコンブ  
 砂糖なんか<sup>29</sup>  
 桶屋<sup>30</sup> 博労<sup>38</sup>  
 樵夫<sup>39</sup>  
 鉄砲うち<sup>49</sup>  
 相撲の関取り<sup>65</sup>  
 呉服屋<sup>69</sup> 酒屋<sup>71</sup>  
 医者<sup>75</sup>

<sup>25</sup>は栃木県の民話

### 蛙他

蛙<sup>5</sup> カラ蛇<sup>11</sup>  
 青蛙<sup>14</sup> ビキ<sup>11</sup><sup>17</sup><sup>58</sup>  
 ゲロ<sup>17</sup> カメ・なめくじ・  
 トクロ<sup>31</sup> 蛇<sup>17</sup><sup>31</sup><sup>61</sup><sup>72</sup> タ  
 カシロビキ(ぐらいの大き  
 さ)<sup>33</sup> ガマ<sup>60</sup>  
 トクロビキ(ガマ)<sup>71</sup>

### 妖怪

天狗<sup>11</sup> 鬼<sup>15</sup><sup>32</sup>  
 あまのじゃく<sup>17</sup>  
 雷どん<sup>24</sup> 鬼婆<sup>30</sup>  
 赤鬼・青鬼<sup>33</sup><sup>75</sup>  
 黒鬼<sup>75</sup> 河童わろ<sup>43</sup>  
 ひよすば<sup>44</sup><sup>45</sup>  
 にた(怪物)<sup>49</sup>  
 山姥<sup>66</sup>

### 樹木

よだきい<sup>1</sup> 節木<sup>13</sup>  
 樫<sup>13</sup><sup>23</sup> 榎<sup>17</sup>  
 松やに・ベラ<sup>21</sup> 梨<sup>26</sup>  
 杉の古木<sup>29</sup>  
 松の木<sup>30</sup><sup>51</sup><sup>53</sup>  
 榊<sup>42</sup> 柿(のシブ)<sup>45</sup>

### 植物

竹の子<sup>8</sup> 唐芋<sup>9</sup><sup>50</sup>  
 ノビル・川ニラ・粟  
 蕎麦稗の種子<sup>23</sup>  
 菖蒲<sup>30</sup> 胡麻<sup>32</sup>  
 ごり(苦瓜)<sup>36</sup>  
 芋の葉・車前草・細  
 辛<sup>44</sup> 大根<sup>46</sup><sup>52</sup>  
 粟<sup>50</sup> 稲<sup>52</sup>  
 竹・花柴<sup>72</sup>  
 熟麦<sup>73</sup>

『日向知つちよるけ話』と語り手

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| A | 西原ハツ (西都市穂北圏) 82歳             |
| B | 上山ツル (宮崎郡佐土原町広瀬町徳ヶ淵) 65歳      |
| C | 石山吉五郎 (宮崎郡清武町南加納) 92歳         |
| D | 遠藤才次郎 (宮崎郡佐土原町下田島新町) 93歳      |
| E | 佐原雷蔵 (宮崎市青葉町在住・東臼杵郡北郷生まれ) 56歳 |
| F | 清水清馬 (宮崎市今村) 73歳              |
| G | 高尾秀三 (宮崎市旭通り一) 35歳            |
| H | 永野伊作 (宮崎郡佐土原町広瀬平小牧) 79歳       |
| I | 永野馬太郎 (宮崎市牟田町) 90歳            |
| J | 野中三郎 (宮崎市吉村町上西十) 81歳          |
| K | 原田圭松 (宮崎市生目村跡江) 70歳           |
| L | 藤田拾吉 (宮崎郡清武町中野) 71歳           |
| M | 藤本滝春 (宮崎郡清武町中野) 59歳           |

※ 年齢は比江島重孝採集当時のもの

『日向知つちよるけ話』と資料集

- |   |  |
|---|--|
| A | 『日向今昔物語』(日高 重孝)                              |
| B | 橋百貨店出版部 昭和35年3月1日刊<br>『半ぴのげな話―日向の昔話』(比江島重孝編) |
| C | 『塩吹き白―宮崎の昔話』(比江島重孝編)<br>未来社 一九五九年11月30日刊     |
| D | 『日向の民話 第一集』(比江島重孝編)<br>未来社 一九五八年11月29日刊      |
| E | 『日向の民話 第二集』(比江島重孝編)<br>未来社 一九六七年12月20日刊      |
| F | 『日向こども民話』(『宮崎日日新聞』にて比江島重孝連載)                 |
| G | 『えびの市老人物語集』(上)                               |
| H | 『日本昔話大成』                                     |







39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	
7	7	6	6	6	6	5	5	5	5	4	4	4	4	4	3	3	3	3	'99 2	
9	2	25	18	11	4	28	21	14	7	30	23	16	9	2	26	19	12	5	26	
常山小僧	古屋のもり	はげねばいいが	●十里かざら	やくさん馬場	シユンクタクタ	すねこ太郎	●五万の木に八万の鳥	鳥のきき耳	食わず女房	男の節句	●「穴を掘れ」も参考に	●道普請の岩	賞品の鏡	屁ひり嫁さん	木県の民話― 〔屁一つで村は全滅〕― 栃	歯なし	〔コバ作りの由来から、ハンぱっぱ〕	●金のなる木	婆吸いつこ	豆米ぶんぶん
3 3 A	古屋の漏			5 3 3	5 3 5	1 3 6 A		1 6 4 B	2 4 4	1 5 1 C		3 1 1	3 7 7	3 7 9	6 3 7			1 6 3 A	取付く引付く	
G	M	H	K	新名常吉	①	①	F	H	G	F	H	K	H	H	L		①	J	H	緒方正三郎
B	B	C	B	C	C	C	B	C	B	B	C	B	C	C	H	B	C	C	C	C
				(西都市穂北串木)		「一寸法師」C				市恒久横町	「五月節句の角巻き」酒井イヨ(宮崎)				東郷美和アウンサー担当					(西都市南方杉安村)
														(栃木県芳賀郡) 1〜25回後藤心平・						

## △資料編▽

## 1 『日向知っちよるけ話』放送一覧

回数	放送年月日	昔話名(放送のさい昔話名)	『日本昔話大成』「昔話の型」	語り手	資料集	( )は語り手居住地
1	'98 10・10・9	よだきい		L	B	( )
2	10・16	よだきごろの話		C	B	「よだきごろの夢」G「たご作のゆめ」 松浦キミエ(西都市穂北)
3	10・23	石屋がいちばん	380	C	B	
4	10・30	ばばの骨	32A	E	B	
5	11・6	出合いの峠	308	①A	C	
6	11・13	団子やれ待て	185	H	C	
7	11・20	塩吹き白	167	①A	C	
8	11・27	こればあさん笠賃よ	203	西原仙助	D	(児湯郡富田村上城元)
9	12・4	ばっちょ笠		H	E	「笠地蔵」新出水蔵人(えびの市出水)
10	12・11	物知り小町		川田高次	F	(児湯郡木城町大字高城字湯屋ヶ坂)
11	12・18	●呑まにゃ放さぬ (呑まにゃ放さん)		K	B	
12	12・25	十二支の由来	12	藤嶋 勉	G	(えびの市土浦)
13	'99 1・8	●正月の節木		C	B	
14	1・15	百足の医者迎え	40	家吉勤次	G	(えびの市北昌明寺)
15	1・22	三年寝太郎	125	①A	C	「三年寝太郎」C
16	1・29	狐の嫁入り		①A	E	(西都市妻町酒元)
17	2・5	みみずは土食よ (ミミズは土食え)	75		C	
18	2・12	鳥の知恵	19A	H	C	
19	2・19	●鴨とり半び	474	H	C	「鴨三羽の大狐ばなし」C

のお地藏さんが行列して帰られる姿が見えた。

これは、爺さんの真心に対してお地藏さんのお札の心遣いであった。このようにして、正直で人情の厚い爺さんは、その人柄によって神仏の加護に恵まれ、今まで貧乏であった爺さんと婆さんの老夫婦は、笠長者と呼ばれ、老後を裕福に暮らしたと言う、修行僧の法話を古老から聞いた昔話である。

(新出水蔵人)

## 女の物知り・半ぴのとちちから語りはじめる

### 10 物知り小町

むかしむかし。ある所に、大変美しい女がいたげな。この女は、美しいだけでなく、頭がよくてなんでもよく知っていた。だから、村の人はこの女を、物知り小町と呼んでいた。

物知り小町が、村を歩いていると、急に雷がゴロンタンゴロンタン鳴り始めたげな。

「わあー、ごろんさまが鳴るぞ。逃げる、逃げる」

「はよう、雨やどりをせにやならん」

村の人はわいわい言って、大きな家の軒下に集った。ところが、雷は、なかなか鳴りやまない。村の人は、物知り小町の顔を見ると、「物知り小町さん、雷はなんぶぐらい鳴るものでしょうか」と聞いたげな。すると、物知り小町はにこにこ笑って言うたげな。

「さあーなんぶ鳴るでしょうか」

「なんぶ鳴るって、五万は鳴るかな」

「なに、五万じゃねえ、六万じゃ」

村の人は、口ぐちに勝手なことを言うていた。物知り小町はそれ

を聞きながら、白い歯を見せて言うたげな。

「雷さん、八万ぐらい鳴りますよ」

「へえ、八万も鳴る。そんげ鳴るもんかえ」

村の人が口をとがらせたところ、物知り小町はすました顔で、「この雷さんは、なかなか鳴りやみませんが、やまん雷は、八万(やまん)は鳴りますよ」

と言うたげな。これには村の人もまいて、

「そうかー八万はやまんか」

と、うなずいたげな。

それから、ある日のこと。庄屋どんが物知り小町に会って、

「あんたはいつまでも若いが、一体なん歳ぐらいまで生きるつもりかな」

と聞いたげな。すると、物知り小町は首をかしげて言うた。

「なん歳と言っても、年は言われませんわ。米粒ならわかりますけど」

「なに米粒ならわかるって、米粒をなんぶ食うんじゃ」

「はい、私は米粒を五十六億八千粒食べたら死にますわ」

これには庄屋どんが困ってしまったげな。五十六億八千粒の米は、七千八百石あるげな。とてもこんな米は一生かかっても食べきれない。

物知り小町は、本当に長生きをして、いつまでも物知りであったげな。

(川田 高次)

\*「ラジオで伝える宮崎民話(上)」では、紙面の都合上10回放送分までとした。(下)にて11〜76回まで掲載する予定である

「じいさん、おもてで、なんか声がするぞ」  
ばあさんはそういつて、耳をたてました。

すると、おもての戸が、がらがらとあいて、

「じいどん、じいどん、地藏の笠賃じゃ、——地藏の笠賃じゃ——」  
と、いいながら、

じゃらじゃらじゃら

じゃらじゃらじゃら

金びかの小判をなげこみました。

「ばあさん、ばあさん、六地藏さんが笠賃じゃげな」

じいさんとばあさんは、手をとりあつて、楽しい年の夜さをこしました。

「正直にや、徳があるげな。徳は得じゃげな」

子供にもそう教えるのが、このばつちよ笠の昔話です。

(永野 伊作)

#### 笠地藏

西南戦争の頃に、飯野郷出水観音を訪れた山伏の修行僧が、附近の農家に宿泊した。その修行僧が、法話として語ったと言う昔話がある。

その昔のこと、ある山里に貧しい生活の老夫婦が住んでいた。この老夫婦は、田畑の耕作地もなくて、爺さんは笠を作つて売り、婆さんは野山の草花やいろんな物を採取して売る、この様な仕事をして生活を営んでいた。

ある年の歳末に、老夫婦は正月を迎える準備を始めた。爺さんは笠作りで、婆さんは正月用品を求めると、多忙であった。

やがて、正月も近づいたある日のことであった。その日は朝から

雪が降っていた。爺さんは笠を七つ持って町に売りに行った。町に行く途中、地藏堂の前に来た時に、石の地藏さんが八体並んで立つておられた。お地藏さんは、頭に雪をかぶり寒そうであった。

そこで、爺さんは、お地藏さんの頭に積もった雪を払い除け、次々と地藏さんの頭に笠をかぶせてみると、七体のお地藏さんは笠をかぶつていられるが、残る一体のお地藏さんには、かぶせる笠がなかったから、爺さんは、自分がかぶっている笠を取つて、その笠を残るお地藏さんにかぶせた。

このようにして爺さんは、正月用金として売るはずの笠を売らずに、お地藏さんにかぶせ、また、自分の笠までぬいでお地藏さんにかぶせ、爺さんは雪を頭にかぶりながら家に帰った。

この爺さんの姿を見た婆さんは驚いて、その理由を尋ねたところが、爺さんが語るのには、地藏堂の庭に、八体のお地藏さんが、頭に雪をかぶつて立つておられた。哀れな姿で寒そうであったから、売るはずの笠を売らずに七体のお地藏さんに笠をかぶらせ、残る一体にお地藏さんには、自分の笠をぬいでかぶらせた。このようなことで、笠の売上金もなく、自分も頭から雪をかぶつて帰ったのであると言った。

爺さんの話を聞いていた婆さんは、

「それはよいことをしました」

と言つて、喜んでくれたから、爺さんは正月用品を買う金を稼ぐため、笠作りにも多忙であった。

いよいよ正月も間近になった、ある日の夜、明け方に、家外で掛け声や語り声などが聞こえ騒々しいので、戸を開けてみると、軒下に掲げた餅や、宝物がたくさんあったから、驚いてあたりを見ると、爺さんの笠をかぶつたお地藏さんが先頭になって、以下七体

竹の子は、ぐんぐん大きくなりました。

ぐんぐんのびて、天まで高くなりました。

とうとう、天のお倉の便所に穴をあけてしまいました。

たいへん、たいへん。欲ばりばあさんは、くさいくさい、うんこをかぶってしまいました。

人まねすつと 糞かぶり。

村の人たちは、欲ばりばあさんに、そういつて笑いました。

(西原 仙助)

## 9 ばっちょ笠

むかし、むかし。

あるところに、じいさんとばあさんが住んでいました。

家が貧乏で、年の夜さになっても、一粒のお米がありませんでした。

「ばあさん、もう年の夜さじゃが。どんげして年をとろかい」

じいさんがそういいました。

するとばあさんが、

「じいさん、ばっちょ笠(雨の時かぶる笠)があつたがよ。あれを町へ売りけ行つたら」

と、いいました。

そこでじいさんは、ばっちょ笠を持って、町へ出かけて行きました。

「ばっちょ笠はいらんかえ」

「ばっちょ笠はいらんかえ」

じいさんは、声をはりあげて、ばっちょ笠を売りけ歩きました。

ところが、年のくれに、ばっちょ笠を買うような家ありません。だいたいばっちょ笠は、夏のもので、寒い冬の師走(しわす)に買うものでは

ありません。

しかし、じいさんは、米を買うお金がほしいので、いつしんに町を、おらんで歩きました。けれども、ばっちょ笠は、とうとう一つも売れませんでした。

じいさんは、とほとほと、村へ帰ってきました。村へ帰る途中で、雨がポロポロとおちはじめました。村の入口になると、雨はざあざあ降りになりました。

「あらあら、六地藏さんが雨にぬれちよる。もぞなきいが」

じいさんは、そういつて、一つも売れなかつたばっちょ笠を、一つ一つ、六地藏さんのあたまにのせてやりました。

ちようど、ばっちょ笠は六つありましたから、六地藏さんは、みんな雨にぬれなくなりました。

「ばあさん、いまじやつた」

じいさんが、そういつて家に帰ってきました。ばあさんは、じいさんが手(なにも持たずに)ぶらに帰ってきたので、

「じいさん、ばっちょ笠は売れたかい」

と、いいました。

「なーに、いまごろ、ばっちょ笠どん買うもんがおろか。もどりに、(帰りに)六地藏さんが雨にぬれちよつたので、ほうど、かぶせてくれたが」

「そうかい、そうかい、じいさん、それはよいことをした」

ばあさんは、そういつて、ひとつも文句をいいませんでした。

そうして、その晩は、からいもを焼いて、それを食べてねました。すると、夜中になって、家の外で、

「ホーイ、ホーイ。じいどん、じいどん。地藏の笠(かさ)持ってきた。

と、おらんでいました。」

うさんな金もうけになると思って、船長さんは、阿呆太郎のヒキ臼をぬすんで、

「塩出ろ——塩出ろ」というた。

それから、ヒキ臼から、どんどん塩がふきだした。ところが船長さんは、うたよみをようと知らんで、お札のコトバがわからんかったかい、ヒキ臼は塩ふきをやめずに、船じゅう塩の山になって、海の底に沈んでしもうた。

それで今でん海の底でヒキ臼がまわるかい、海の水は塩からいげな。

(西原 ハツ)

### 宮崎でも笠地藏 — 雨・地藏・金びかの小判 —

#### 8 こればあさん笠賃よ

むかし、あるところに、信心のあついはあさんが住んでいました。ある日ばあさんは、お寺参りの帰り道に、雨にぬれている地藏さまを見ました。

「これこれ地藏さん。雨にひんぬれて冷めたかろうや」

ばあさんはそういつて、町へ出て笠を買ってきました。そうして、その笠を地藏さまにかぶせてやりました。

ところがその晩のことです。ばあさんの家の戸を、とんとんとたたく者があります。ばあさんは戸をあけてみると、笠をかぶった地藏さまが、

「こればあさん、笠賃よ」

「こればあさん、笠賃よ」

といいながら、山吹色のまぶしい小判を、ぼんぼん、投げこみました。

つぎの晩も、そのつぎの晩も、

「こればあさん、笠賃よ」

「こればあさん、笠賃よ」

と地藏さまが、小判をぼんぼん投げて帰りました。

ばあさんは、たちまち大金持になってしまいました。

これをきいた、となりの欲ばりばあさんが、雨の降るのを待っていました。

雨がぱらぱら降ってきたので、よろこんだばあさんは、町へ行つて笠を買ってきました。そうして、地藏さまにかぶせてやったのです。それから欲ばりばあさんは、毎晩、

「こればあさん、笠賃よ」

と、いつてくるのを待っていました。

しかし、地藏さまはたずねてきません。

ある晩のこと。

ようやく地藏さまがやってきました。

「こればあさん、笠賃よ」

といつて、地藏さまが投げこんでくれたのは、ちぎれた馬のわらじでした。

かんかんにおこった欲ばりばあさんは、

「こんげ、へえとも知れんもん。湯殿さねくべろ」

といいました。

欲ばりばあさんは、湯殿の灰を裏の畑へ捨てました。すると、その灰のなかから、よきによきと、竹の子が一本生えてきたのです。

人マネしてん、のさらんもんは、のさらんわい。

(永野 伊作)

## 7 塩吹き白

むかし、あるところに、阿呆あほうげな男がおつて、みんな阿呆太郎と  
いうていたげな。阿呆太郎は船に乗りてしてたまらず、

「船長さん、船にのしてくれや。船にのしてくれや」

と、おがむごつ頼んだげな。

それで、船長さんは阿呆太郎を船にのせてやつたげな。阿呆太郎  
は、みんなから尻にしかれて、「アホ アホー アホ太郎」とい  
て船の掃除役じゃつた。

そして、その船が港さねつて、船長さんひとりのこして、みん  
な陸おかへあそびに行つたげな。阿呆太郎は、どこへもあそびにい  
かん  
で船にのこつていたげな。——すると、船長さんが、

「阿呆太郎——おまえもあそびにいってこいや」  
というた。

そして阿呆太郎は、あるばあさんところへ行つた。するとばあ  
さんは、阿呆太郎を子供の（かわいがつて）ごつ、

「おまえ、なにがほしいか。なんでもほしいものを食べさせてやる  
がよ」

というた。

すると阿呆太郎は、

「おれは海で育つたかい——ウナギが食べたい」

というた。

「ええーウナギかい。ウナギならおやすい御用じゃ」

ばあさんはそういうて、押入れからヒキ白うすを出して、

「ウナギ出る、ウナギ出る」

と、うたよみをいうと、たくさんウナギが出た。それではあさんは、  
阿呆太郎にウナギのごつそうを食べさせてくれたげな。

阿呆太郎はたんぷり（たっぷり）ウナギをごちそうになつてかえろうとした。  
すると、ばあさんが、

「わたしは年よりで、もうこのヒキ白はいらんかい、おまえにあげ  
よう」

というた。

そうして、このヒキ白にや、うたよみがあつて、

「なにそれ出してくれ。ヒキ白さん——というて、なにそれが出  
てくると、ありがとう、おおきに——とあたまをさげにやらん」  
と、ヒキ白のつかいかたを教えてくれたげな。

それから阿呆太郎は、ヒキ白をもらうて、船にもどつた。

そして、いつ時すると、ある戦争がはじまつたげな。戦争は、負  
けいくさになつて、どんどんやられてしもうた。阿呆太郎は、

「もつと兵隊を出してあげたら、殿様がよろこぶじゃろうなあ」

と思つて、ばあさんにもろうたヒキ白を出して、「兵隊でろ——  
兵隊でろ」の、うたよみをいうた。すると、ヒキ白から、大きな棒  
をにぎつた兵隊がぎょうさん出てきて、敵をやつつけたげな。

それで殿様が、阿呆太郎をよんで、

「ほうびをあげようが」

というたら、阿呆太郎は、

「なんにもいりません」

というた。

それから、船長が、阿呆太郎がヒキ白を持つちよることを知つて  
いた。ちようどそのころ、塩のききんで、塩をこしらえたら、ぎよ



大阪の蛙が京都見物に出かけた。

おたがいに、ぴよん、ぴよんとんで、ある峠で行き合つたげな。  
 こん峠は、出合いの山というげな。

大阪の蛙がいうた。

「あんたはどこへ行くとか」

すると京都の蛙がいうた。

「おれは大阪見物さね行くとこじゃ」

「へえー大阪見物かい。おれは京都見物じゃが」

「うん、ここであらかじを見物しようか」

ふたりは、そんげいうて、京都と大阪を見物したげな。

すると大阪の蛙がいうたげな。

「京都も大阪もおなじじゃねえか」

「うん——大阪も京都もおなじじゃねえか」

「おなじどころさね、わざわざ見物に行かんでいいがな」

「まこつちや。もう、ここからもどろうかい」

京都の蛙もそんげいうた。

「うん、帰ろう」

「うん、帰ろう」

大阪の蛙も、京都の蛙も、出合の峠から、ぴよん、ぴよんとんで、

大阪と京都に帰つたげな。

蛙は、目玉がうしろにあるかい、京都の蛙も大阪の蛙も、自分か  
 たの町を見ていたんじゃげな。

(西原 ハツ)

## 6 団子やれ待て

むかし、正直なじいさんがおつて、山の畑に、弁当持って仕事に

行つておつた。

昼めしに持ってきた団子をだいて、食べよつたら、団子が、くる  
 くる転げて、下の田へ落ちていった。じいさんは、

「団子やれ待て。団子やれ待て」

というて、団子を追いかけたげな。

すると、団子は穴のなかさね転げて、ねずみどんの唄がきこえた  
 げな。ねずみどんは、

「猫さん さのね。やとせのせ」

というて、モチを搗いておつた。

そこで爺さんは、

「グルル ニヤア」

と、猫のマネをしたげな。

すると、ねずみどんたちは、たまがつて、ひんにげたげな。そこ  
 でじいさんが、モチ搗きの臼を見たら、臼のなかでモチでねえして  
 錢だまをついておつた。

それで正直じいさんは、金持ちどんになつたげな。

すると、欲の濃こいじいさんが、はなしをきいて、わざくと団子を  
 転がして、

「団子やれ待て。団子やれ待て」

というて、団子を追うていたら、ねずみどんの唄がきこえた。

「猫さえこねば やとせのせ」

というていた。それで、欲の濃こいじいさんが猫鳴きのマネを、

「ぐるっ にやう ぐるっ にやう」

というたげなが、それかい「ひひひ」と、笑おうてもたげな。

すると、ねずみどんが、腹かいてぎようさんよつてたかつて、爺  
 さんをひっかかじつて、爺さんは、大怪我けが人でもどつたげな。

「それみよ、やっぱり石屋がいちばんいいじゃろがな」  
そこで三代目の孫も、親ゆずりの石屋になつたげな。

(石山吉五郎)

#### 4 ばばの骨

じいさんが山に罫わなをかけちよつたら、狸がかつたげな。  
じいさんが肩にかついでもどりよつたら、途中で生きかえつたん  
じゃろ。観音さまの前で煙草を一服すつちよつたら、きゆうに観音  
さまが二つならんじよつた。

「こりやどうしたもんか。どっちが観音さまか知れんが。叩たたててみ  
たら、本当、観音さまは動くから知れるわい」

「これが本物ほんもんじゃが、動くが、動くが」

「よおし、本物の観音さまにしるしをしちよらにやいかん」

そんげいうて、じいさんは観音さまにばけた狸をきびつたげな。

それからじいさんは、狸の化けた観音さまをかついで帰つた。

しばらくして、じいさんは用があつて狸を転ころかしたまま出て行き  
やつたげな。

ばあさんが帰ってきて、魂たまげたげな。庭に、じいさんがしばらく  
て転ころげているがな。狸がじいさんに化けたんじゃが、ばあさんは知  
らんとじゃ。

「ばあさん、ばあさん、はよう俺が縄をといてくれんかよ。はよほ  
どかんかよ」

ばあさんは、じいさんの縄を解いた。

それからばあさんは、

「じいさん、唐臼からうすふんでくれんかよ。ちつと粉つかにやいかんが」  
といった。じいさんに化けちよる狸は、すつとん、すつとん唐臼を

踏みはじめた。ばあさんは、唐臼からうすのそばで、ませかたをしやつたげ  
な。すると、じいさんが、

「ばあさん、まちつと前に出らにや。まちつと前に出らにや、よう  
ませられんが。ませかたが足らんぞ」

とおらんだ。すると、ばあさんが臼うすの前に頭を出したげな。そのひょ  
うしに、じいさんは、力まかせに踏みつけて、ばあさんを打ち殺し  
てしもた。

狸はばあさんをじゆ(料理して)つて、こんどは、ばあさんに化けた。それか  
ら、じいさんがいん(帰ってきた)できたげな。

「じいさん、じいさん。狸をじゆつておいたが、今夜は狸汁りじゆじゃぞ」  
じいさんは、うまいうまいといって、狸汁を食うた。すると庭の  
方から、

「じいさんがばば食つた。じいさんがばば食つた」  
とおらんだ。

「なんじゃ、狸のやろじゃねえか」

とじじが魂たまげて顔を出した。すると、ばあさんに化けた狸が、しつ  
ぽをふつちよつて、

「じいさんがばば食つた。床の下を見てみれ、床とこ下したにや、ばばの骨  
があるぞ」  
というたげな。

(佐原 雷藏)

※これから先は兎の登場で仇討ち話は定形の昔話だから省略した。

#### 5 出合いの峠

むかし、むかし——京都と大阪に蛙がおつたげな。

京都の蛙が大阪見物に出かけた。

が——」

じいさんのいう通り、その一けん家には、なんどもダンスも、長もちもなかった。しかたがないので、男たちは、

「せっかく来たんじゃかい——火でもぬくませてもらおうかい？」  
というて、いろりの火をどんどもやしはじめた。いろりの上のかまに入っているたご作はあつくてたまらない。くるしいので、もがいていると、男たちがいうた。

「じいさん、あのかますが動いたぞ。なにが入っているんじゃ」

「はい、茶が入ってるばい」

「なに、茶が動くものか。それつけ」

男たちがヤリをもって、かますをついたげな。たご作は、「あーつ」と声をあげて、かますから落ちていった。そうして、

「やあーこりゃ、ゆめか？ ゆめでよかった。もうよだきごろはやめたわい」  
というて、からだをぶるぶるふるわせたげな。

(松浦キミエ)

### ポピュラーな昔話

#### 鼠の嫁入・勝々山・おむすびいりりん……

### 3 石屋がいちばん

石屋に息子ができて、それが三代目の孫じゃったげな。

その孫が、

「石屋はすかさんが、石屋はせん」

というたげな。

そこで、爺さんが、和尚さんとこさね行って、

「うちの孫は石屋をせんというが、石屋をするごつげち<sup>(説教)</sup>してください」  
というたげな。そこで和尚さんが石屋の孫を呼んできいたげな。

「おまえは石屋を好かんごついうが、何になるつもりか」

「わたしは馬に乗った武士が好きじゃ」

「なに武士になりてえ。それが一通りの心配がいるが、武士の上には殿様がおつて、そこ行けあそこ行けというて、ちっとん頭はあがらんぞ」

「そんならわたしは、その殿様になります」

「なに殿様がいかろうか、その殿様の上にはてん<sup>(天)</sup>かという人がいなるぞ」

「そんならわたしは、そのてんがになります」

「てんがになつてみよ、てんがの上によお日さまという人がおるが」

「そんならわたしは、そのお日さまになります」

「なにお日さまがいいかろうか。むしろ干しちやひやがらというて、雲が出てくるが」

「そんならわたしは、その雲になります」

「なに雲がいいかろか。東から西から風が吹いてきて、思<sup>(思っ)</sup>うごつ動かれもせんぞ」

「そんなら和尚さん、わたしはその風になります」

「なに風がいいかろか。西にも東にも大きな岩があつて、西へいけばびんた<sup>(頭)</sup>をこずき<sup>(打つて)</sup>、東へ行けばむこうずらを打つがよ」

「そんなら和尚さん、わたしはその岩になります」

「どうしてまた岩がいいかろか。岩になつてみよ。石屋というえらいやつがおつて、毎日<sup>(めいじち)</sup>毎日、こつちんこつちん、切られるがよ」

「そんなら和尚さん、わたしはその石屋になります」

とわめきあげた。すると月の光で地面に木の影が映っていた。その木影に七兵衛が見えたげな。

「こらうな。(この野郎)七兵衛のがき、木の上に逃げちよるな。今に食うてくれるわい」

と怒って、鬼婆はそろそろと木に登りはじめた。七兵衛は、つかまつたら大事と上へ上へと逃げた。もう木の頂上でこれ以上登ることができません。登ってきた鬼婆の手が七兵衛の足をつかまえたげな。

「助けてくれ、助けてくれ」

七兵衛は汗びつしよりかいて叫んだげな。

「ああおじかった。(恐しかった)いま(今の)んとは夢じゃったか」

七兵衛はそれから、よだき(怠け者をやめて)ころをやめて、村一番の働き者になっただげな。

(高尾 秀三)

#### たご作のゆめ

むかし、むかし。あるところに、たご作という、よだきころがおつたげな。たご作はいつも、

「しごとはせんで、あそんでいて、うまいもんをくわせてくれるころは、ないどかい？」

というていたげな。

すると、ある日のこと。山伏どんが通りかかって、

「しごとをせんで、うまいもんを食べさせるところへ、つれていってくるるが」

というて、たご作をおく山の一けん家につれていったげな。

一けん家にきたたご作はほんとうに毎日、毎日、あそんでいて、ごちそうがわたった。

「こんげないところはなわい。まこちこは極楽じゃわい」

たご作はそんげいうて、よろこんでいたげな。

ところがある日のこと。シクシクとむすめのなく声がきこえてきた。そこで、たご作が、むすめにきいたげな。

「どうして、あんたはそんげなきなさるのか？」

「たご作さん。あなたはもうすぐ、からだをさかさにつるされて、青松葉(いぶされ)ですべられて、あぶらをしばらくられますんじや。かわいそうに

—— わたしはそれがかなしくて、ないてますんじや」

これをきいたたご作はびっくりきようてん。さつそくにげだそうと思つたら、ヤリを持った男たちが見はりに立っていた。

「こりや、便所に行つてにげにやならん」

たご作はそう思つて、便所へいったところ、便所は谷にかかっていたげな。

たご作は死にもぐるいで、便所から谷へとんだところ、うまいぐあいにかずらがさがつていて、谷の下の道へおりた。

それから、えつさえつさ——、山道をにげると、一けん家があつて、じいさんがおつたげな。

「あぶらしほりにおわれています。どこかにかくしてください」

「あのかまげにはいつてかくれるといい」

じいさんはそういうて、いろりの上にあげてある、かまげのなかにたご作をかくしてくれた。

しばらくたつてのこと。ヤリを持った男たちが、じいさんの家におしかけてきた。

「こら、じいさん。ついさつき、この家にわかい男がにげてきただらう——どこにかくしたか？ はやくだせ」

「いやいや、こんなあばら家に、人をかくすところはありません

## よだきごろの夢

(怠け者)

むかし、七兵衛というよだきごろがいたげな。仕事は何ひとつせんと、朝からぶらぶら遊んでいたげな。

ある日、日あたりのよい部屋で昼寝をしちよると、

「七兵衛さんいなさるかよ」

という、女の声でした。七兵衛がひよつこら起きていくと、若い女子が立っていた。

「あなたが七兵衛さんですか」

「わしが七兵衛じゃが、なにか御用かな」

「そうですかな。七兵衛さん、きょうはわたしがとてもよい所に案内しますが、それはとてもよい所ですよ。おいしい物はぎょうさんあるし、一日中何もせずに遊んでいてよい、夢の国です」

七兵衛はみょうなことをいう女子じゃと魂けたが、よだきごろには願ってもないいい話のごつある。そこで七兵衛は女子のあとについて山を越え川を渡って行くと、こんげなところに見事な御殿があるか、と目をばちばちさせて見まわしたげな。

朱や緑の塗りつけられた竜宮城のごつりつばな家じゃった。

すると美しい女子が出てきて、

「七兵衛さん、ようおいでなさいました。わたしがこの家の主人です。何時までも泊まっています。なにか御用の時には、手パンパンと二つ打ってください。女中が参りますから」

というたげな。

それから七兵衛が手をパンパンと打ったげな。すると女中が出てきた。

「何か御用でございますか」

「ああ腹がへった、何かうまい物を食わせてくれ」

やがて女中が御馳走を皿に山盛りに持って来た。七兵衛は、

「これはうまい、うまい」

と腹いっぱい御馳走を食うと、ゴロリと横になっていた。毎日毎日、おいしい物を食うてはぶらぶらしている七兵衛は、みるみる肥えて相撲取りのごつなつたげな。

ある夜のこと、七兵衛はあまりお月さんがきれいなので外へ出て見たげな。

すると何処からか女子の泣く声がきこえてきた。そこで七兵衛がそばによってみると、草のかけで家の女中が泣いていた。

「なぜ泣いているのか」

「七兵衛さん、あなたは何も御存知ないでしょうが、実は私の主人は鬼婆なのです。七兵衛さんのごつ、遊んでぶらぶらしている人間を連れてきては、おいしい物を食わせて、まるまる肥ってきたら殺して脂を取るのです。七兵衛さん、あなたはもうじき殺されますが、わたしはそれが悲しいので泣いているのです」

これをきいた七兵衛は魂けて、

「こりやおおごついまのうちにひん逃げなほくじじゃ」

といいながら庭を走り出したげな。

七兵衛は毎日御馳走ばかりくうて怠けていたので、肥えてだぶだぶじゃった。ふうふう息をはきながら逃げて行った。

しばらく夢中に走って疲れたかい、そばの石に腰かけて、

「やれ、やれ、もう大丈夫じゃろ」

と一息休んでいた。すると向こうから鬼婆が追ってくるのが見えた。七兵衛はもう走るこつも出来ずに、そばにあった高い椎の木に登ってかくれていた。やがて、鬼婆が木の下にやってきて、

「七兵衛、どこさね逃げたか。七兵衛、人くさいぞ、人くさいぞ」

く自然な表情で語り始めた。

藤田さんの昔語りは、発端に、「これは一心ということが土台のはなしじゃ」と云って、幼い聞き手への教訓性を願っていることを伝える。「菌なし」「仁王と鰐口」「千石船の夢見」など、この藤田さんの代表的な昔話を聞くと、そこに楽しい昔話の筋の變化が感じられる。「幼い子供のために」といった藤田さんの人柄が、この昔話の伝承を受けとめたといえよう。

これら三点の比江島の思いを、私なりに次の世代へと語り継ぐ行為の一つとして、ラジオで伝える宮崎民話をまとめたと思ったしだいである。そして、MRT宮崎放送で一年半放送された「日向知っちよるけ話」というラジオ番組も、比江島重孝の魂にゆり動かされて成立したものであるとの思いにもいたったしだいである。

比江島先生の宮崎県昔話への熱き思いを、これからも私なりに語り継いでゆきたいと思っている。

## △原話集▽

### 宮崎を語る「よだき」

#### 1 よだき

むかしむかし。

今はもうそういう鳥はいないかもしれないが、そのころは借金取りという鳥がおったげな。なんでも水の中、さもなれば木にとまる鳥じゃったげな。

じゃが借金鳥のとまる木は、(怠け者)よだき(怠け者)という木が好きじゃったげな。そのよだきという木には、根が二本あって、朝寝昼寝といった。

この根をこぐには、このよだきの木のまわりに、(根)こん気という苗木を植えて、これを太ら(太)かさになだめじゃげな。それから辛抱(辛抱)という棒をて(棒)こにして、朝寝昼寝をこぎおとすといげな。

辛抱は車をまわす力のあるものじゃ。  
これでよだきの木は、す(す)つかり(す)枯れてしまげな。

(藤田 拾吉)

#### 2 よだきころの話

(怠け者)むかし、よだきころが笠をかぶって、口をあーんあけて道を歩きよったげな。

すると向こうから、にぎり飯をさげて来(来)よったげな。

「もしもし、おまえさんは、口あーんあけちよるが、にぎり飯がほしつちやろ」

そんげいうて尋ねよたら、よだきころは、

「にぎり飯はほしいが、お前が食べさせてくりやり」というたげなかい、

「なにいうか馬鹿が、口あけちよって、にぎり飯入れればいっちゃが、そんげなこつをようせんかよ」

と腹かいたげな。

すると、よだきころが、

「口あけちよつとは、笠(笠)んひもを結んじよらんかい、口あーんあけてひつぽるとじゃが」

というたげな。

(石山吉五郎)

# ラジオで伝える宮崎民話(上)

矢口 裕 康

## はじめに

ラジオで伝える宮崎民話をまとめるにあたり、先ず「日向知つちよるけ話・原話集」を編んでみた。すると、三つのことに気づいた。その第一は、比江島重孝が『塩吹き白』解説「語り手の周辺とその年輪」で述べていることである。

現代の社会においては、昔話を語り合う享受の世界は消滅している。しかし昔話そのものの伝承あるいはその管理については、それぞれの古老の胸のなかに、しずかに眠りつづけている。が、その古老の胸の眠りをさまし、そこに息吹きを与えるのが、採集者のしごとでもある。

西原ハツの胸のなかに、長く眠りつづけていた昔話は、新しい聞き手であるわたしの耳によって覚醒された。

としている。西都市の語り手西原ハツについて述べた一文ではあるが、このことは比江島の聴き手との関わり方を具体化したものといえる。私は、この比江島によって聴きとられた昔話を中心に、MRT宮崎放送ラジオという媒体をつうじて、さらに再生する試みをおこなったと思っている。ことばによる伝承は、比江島のように文字により記録することも必要であるし、その昔話に息吹をふきこみ、さらなる語りとして具体化し、伝承してゆく姿も必要であろう。

また第二に、七十六回のラジオ放送昔話素材は、結果として△『日向知つちよるけ話』とりあげ昔話数▽をみてもわかるように、一番たくさんさんの昔話を選択した語り手は、永野伊作であった。永野については、『塩吹き白』「解説」末尾でもふれているが、『日向の民話 第二集』「はしがき」でも、次のようにふれている。

それに、なによりもうれしかったことは、永野伊作さんという、すぐれた昔話の伝承者にめぐり会えたことでもあります。(中略) わたしはいつも、すぐれた民話の伝承者に会うたびに、その記憶の鮮明さもさることながら、その常民生活のなかに鍛えられた力づよい信念に満ちた人生観に心をうたれるのであります。永野さんも、まさにそれにふさわしい伝承者で、手がるに竹籠を編み、魚をとり、鎌をとるわかかしさをひめていました。

聴き手比江島の永野伊作に対する思いが、文字化された昔話集にもこめられてゆえの十二話という選択であったと思えてならない。

そして第三に、「日向知つちよるけ話」は二〇〇〇年三月三十一日放送の、藤田拾吉「もぐら」を素材として語り納めとした。比江島は『半びのげな話―日向の昔話―』「はしがき」で、語り手藤田について次のように記している。

運よく藤田さんにめぐり会った最初の日、「では、もぐらをしてみましょうか」と、子供にせがまれた時のように、気楽に、ご